

1 イスラームの概要

興亡の略史

イスラームはアラビア半島の商業都市マッカ（メッカ）で興った一神教である。商人であったムハンマドが神の召命を受けて預言者となり、宣教活動を始めた西暦610年から、彼が死ぬ632年までに神から授かった啓示をもとにして展開した。ムハンマドが、生地マッカでの迫害を逃れるためにマディーナ（メディナ）へ移って本格的に教団を設立した西暦622年の元日7月16日をヒジュラ暦（イスラーム暦）元年とする。

この移住、ヒジュラは、イスラームが名実ともに世界宗教となる大転回点となった。ムハンマドは宗教的指導者であるばかりでなく、政治的指導者としても能力を発揮し、宗教集団は同時に政治集団ともなった。その後、イスラームの支配地域は急速に拡大した。641年に当時ビザンティン帝国の支配下にあったエジプトを征服し、661年にダマスカスを首都とするウマイヤ朝、749年にバグダードを首都とするアッバース朝が相次いで成立した。711年にはイスラーム軍がスペインへ侵攻し、755年にコルドヴァに後期ウマイヤ朝が成立すると、1492年にキリスト教徒側の領土回復運動が成功するまでのほぼ800年間、イスラームはアンダルシア地方を中心にスペインを支配し、ヨーロッパの文明形成に大きな影響を与えた。1922年、オスマン帝国が滅亡するまで、イスラームは、ある意味で政治的にも文化的にも世界の中心にあった。

アブラハムの宗教

イスラームは、共通の祖アブラハムに由来する宗教として、ユダヤ教、キリスト教と同一の「セム的」伝統を持つ兄弟宗教である。イスラームでは、ユダヤ教徒とキリスト教徒を神が啓示した同種の聖典をもつものとして「聖典の民」と呼び、イスラームの支配地域では一定の税金（人頭税、ジズヤ）を科して信教、居住、職業の自由を保障した。

近年までイスラーム国家内では教育、文化、金融業などの担い手としてユダヤ教徒、キリスト教徒が活躍した。現在でもイスラーム国・地域にキリスト教徒も多く住む。ユダヤ教徒とは2000年にわたる「父祖伝来の仇敵」という表現は歴史的にも宗教的にも根拠がない。実際に1948年のイスラエル共和国の建設まではユダヤ人との平和的共存が続いていた。「右手にクルアーン（コーラン）、左手に剣」という西洋的な誤解と偏見は現在でも根強いが、イスラームが武力を背景に改宗を迫った事実は、ほとんど見られない。初期イスラームの急速な拡大の理由としては、イスラームの支配が、当時のビザンティンの支配に比べて政治的な抑圧が少なく、税金の率も低かったということが挙げられる。また前述のように信教の自由を認めており、宗派間の論争には関与しなかったので、中東地域のキリスト教徒がイスラームによる支配を支持したことも大きな理由である。

世界第2位の宗教勢力

創唱者がアラブ人ムハンマドであるためにアラブ人に固有の宗教と思われがちであるが、成立当初から共存と融合を掲げた世界宗教である。イスラームは当時のアラビア半島に根づいていた頑迷な血縁主義や部族主義を打破して、人種、国籍、身分にかかわらず、あら

ゆる人間は全知全能の神の前では絶対的に平等であると主張した。また、基本的な教義を崩しさえしなければ、大幅な土着化が許容されたために、瞬く間に世界中に広まった。

イスラーム教徒のことをアラビア語でムスリムという。

現在イスラームは、世界中で16～17億人ともいわれる信徒を抱える、世界第2位の宗教勢力である。アフリカの大西洋岸から東南アジア、ヨーロッパ、中央アジア地域、中国の西北部まで分布している。インドネシアは約2億の人口の80～90%がムスリムで、世界最大のイスラーム教国である。アジアではほかにマレーシア、バングラデシュ、パキスタンなどがイスラーム教国である。当然ながら、アラブ諸国、つまり北アフリカや中東の国々はほとんどがイスラーム教国である。最近ではヨーロッパに1800万人以上のムスリムが住んでおり、北アメリカでもユダヤ教徒の人口を抜く勢いで成長している。

在家の宗教——政教一致的な理想

「イスラーム」の意味は「服従、平定、平和」などで、ここから神に全てを委ねることという意味が生じて「唯一なる神への絶対帰依」という用語となった。宗教の名称なのに「教」をつけないのは、イスラームという言葉に「道、教え」などの意味が含まれているからであるが、日本語で「イスラム教」と呼んでも間違いではない。

イスラームで信仰の対象となる「神」は「アッラー」と呼ばれるが、これはアラビア語で「神」という意味の語であり、アッラーという名前の神ではない。「アッラーの神」という表現は間違いである。本稿ではすべて「神」と表記する。

イスラームは、人間の霊的な側面のみを高位におくことをせず、精神的にも社会的にも普通の日常生活の中にこそ宗教的な修行の場があるとする在家の宗教である。政治や経済にまで直接の指示を与え、いわば「政教一致」を理想としているので、一般的な宗教の枠内には納まらない多様性がある。

シーア派のイマーム崇敬、土着の聖者崇拜などの例外を除いて、原則として聖職者を認めず、出家や隠遁生活を評価しない。教会や本山にあたるような教団組織を持たないために、共同体（ウンマ）の決定事項については、信徒ひとりひとりの見解の一致が重要視される。しかし、実際にはウラマーと呼ばれるイスラーム法学者の見解の一致が実効力をもっている。ウラマーはイスラーム社会の指導者として、ある意味では聖職者の役割も果たしているが、彼らの見解や発言には「神聖性」は認められていない。

2 イスラームの教義（スンナ派の教義）

ムハンマドは普通の人

イスラームには、全信徒の90%以上を占める多数派のスンナ派と、残りの約10%のシーア派諸派がある。ここではおもにスンナ派の教義を説明する。

イスラームの根本的な思想は、信仰告白の「神のほかに神はない。ムハンマドは神の使徒である」という言葉に要約されるように、唯一の神と人間が向き合う単純で明快な教義である。キリスト教のように神と人間を仲介する「神の子」や「メシア」など、救世主の思想はない。ただし、シーア派にはイマーム崇敬があるが、これはムハンマドの娘婿のアリー（第4代正統カリフ）とその子孫を無謬のイマームとして神格化したものである。

創唱者のムハンマドは最後の最高の預言者として尊敬されるが、「飯を食べ、市場を歩く

人」というまったく普通の人間であるとされる。生涯に数度結婚をし、子どもも儲けた。ムハンマドの人柄や生き方は信徒の模範とされているが、神格化は行なわれなかった。基本的な教義は「六信五行」にまとめられる。

六信

「六信」とはムスリムがその存在を信じなければならないもので、神、天使、聖典、預言者、来世、予定、である。

- ① 神——神とは、天地の創造主、宇宙の支配者である永遠なる唯一絶対の神であり、全知全能の人格神である。神は人間による一切の表象を禁じており、旧約聖書にみられるような「神の似姿」という考えはない。したがって偶像崇拜を厳格に拒否するために、宗教的な場では音楽、肖像画、彫刻なども否定される。
- ② 天使——天使は神によって光から作られ、神の手足となって働く存在であり、神と人間の連絡役を果たす。ムハンマドに神の言葉クルアーンを運んできたのは大天使ジブリール（ガブリエル）である。クルアーンには超自然的存在として、ほかにジン（幽鬼）、悪魔も認められている。
- ③ 聖典——イスラームは神が天地を創造した時から人間に与えられた宗教である。神はそれぞれの民に預言者と言葉をセットで与えたので、モーセの律法、ダビデの詩篇、イエスの福音書も神の言葉、つまり聖典である。しかし、以前に言葉を与えられた民は、それらを正しく理解せず歪曲してしまったので、ムハンマドには特に選ばれた言語アラビア語で記された最後の最高の言葉、クルアーンが与えられた。
- ④ 預言者——クルアーンには、原初の人間アダムをはじめとして新旧聖書の預言者とアラブ人の預言者、計 25 名が紹介されているが、ムハンマドは預言者の封印、最後の最大の預言者である。預言者の中でも、特に神の言葉を授かった者を「神の使徒」と呼ぶ。モーセ、ダビデ、イエス、ムハンマドが使徒である。
- ⑤ 来世——神が創造したこの世界はいつかかならず終って、時間のない永遠に続く来世がやってくるという終末論であり、人間の死後の復活を信じることである。来世は個々人の責任が厳密に問われる賞罰の場である。そこでは、生前の人間が自ら選んで行なった行為に応じて審判が実施され、善人には樂園が、悪人には火獄が用意されている。
- ⑥ 予定——世界は神の計画と意思によって動いていると考えられることで、いわば宿命論である。ここでは神の全知全能性が強調されており、人間の意志や責任論の入り込む余地はない。クルアーンには絶対的な神の予定と、人間の自由意志と責任というあい反する立場が併存しているが、この考えは宗教思想にはよくみられるものである。

五行

「五行」とはムスリムが行なわなければならない基本的な宗教儀礼のことで、信仰告白、礼拝、喜捨、断食、巡礼、である。

- ① 信仰告白（シャハーダ）——「神のほかには神はない。ムハンマドは神の使徒である」という二つの言葉をアラビア語で唱えることである。入信儀礼では成人男性二人以上の証人の前でこの言葉を唱える。また毎回の礼拝時にも必ずこれを唱える。「神のほかには神はない」だけでは、ユダヤ教、キリスト教の信仰告白にも通用するので、イス

ラームの独自性を示すものとして第2文のムハンマドに関する文章が加えられた。

- ② 礼拝（サラール、サラート）——義務の礼拝は、日没、夕べ、暁、昼、午後一日5回、マッカの方角をむいて行なわれる。金曜日の正午にモスクで行なわれる集団礼拝はもっとも価値がある。礼拝は、定式に基づいて身を清めた後で、決まった手順と方法で行なわれる。
- ③ 喜捨（ザカー、ザカート）——自主的な布施ではなく義務の献金であり、「定められた喜捨」ともいわれる。一定の税率が決まっているので、宗教税ともよばれる。用途は、寡婦や孤児、乞食や貧しい巡礼者などの困窮者の救済や信者の相互扶助などである。モスクやモスク付属学校などの建設や維持に費やされる費用は「ワクフ」という自発的な寄進制度からの運用である。
- ④ 断食（サウム）——イスラーム暦（ヒジュラ暦）第九月（ラマダーン月）の一ヶ月間に、日の出から日没まで、飲食を絶つとともに喫煙、性交などの人間的な欲望から身を清めることで齋戒ともいう。信者は喉の渇きを耐え忍びながら、神の日ごろの恩恵への感謝と、貧者への思いやりを涵養する。ほぼ10歳までの子ども、病人、妊婦、旅人、戦闘中の兵士などは断食を免除される。
- ⑤ 巡礼（ハッジ）——これまでの四つの行はすべての信徒に義務づけられているが、義務としての巡礼は「そこに旅をする能力のある者」に課せられる義務で、肉体的、金銭的にマッカまで旅行することが可能な者が一生に一度行なえばよい。義務の巡礼とは、第12月（巡礼月）の8日から13日までに、決められた方法でマッカのカーバ神殿に参詣することである。現在では毎年、2,300万人ものムスリムが世界の各地から集まり、ほぼ同時に一定の儀礼を行なうが、その光景はじつに壮観である。マッカとマディーナは特別な聖地であり、ムスリムでなければ訪れることはできない。

3 聖典クルアーン

神の言葉

イスラームの聖書であるクルアーンは、神がアラビア語で人類に下した啓示をそのまま書き留めたものである。クルアーンすべての章句は一言一句、紛れもない永遠の神の言葉であると考えられている。これが他の宗教の聖典や経典と比べてもっとも異なる点である。いわば著者は神であり、外典や偽典などは一切ない。

神がムハンマドに語りかけた言葉は、そのまま信者に語りかけられる神の言葉である。ムハンマドの死後はもはや神の言葉が下ることはなくなったが、信者はクルアーンを朗誦することによって、神と向き合い神の語りかけに接することができる。アラビア語の「クルアーン」とは、本来「声に出して詠まれるもの」という意味である。聖典を日々、声に出して読誦することが信仰上の根幹ともなる。

クルアーンの音楽性

クルアーンは全部で114章であり、前半にはおもに後期のマディーナ時代の啓示が、後半には前期のマッカ時代の啓示が纏められている。内容は唯一の神への服従の命令、終末の警告、宗教儀礼から、社会生活や家庭生活上の法規範、慣習、政治的理想などにまで及ぶ。しかし、クルアーンの記事は日常的な会話表現と商売用語で綴られており、月並みな

道徳訓や断片的な警句などの繰り返しが多く、物語性に欠けている。

クルアーンが1400年にわたって世界中の人々をひきつける秘密はアラビア語にある。クルアーンはアラビア語の韻を重視した散文学の傑作であり、アラビア語で朗誦することによって音楽性や芸術性が表現される。また同じ文章の繰り返しは、聞く者を陶醉の境地へといざなう力をもっている。クルアーンは神に選ばれた聖なる言語アラビア語で書かれているために、原則として翻訳が認められていない。しかし、翻訳不可のひとつの理由は、外国語に翻訳すればその独特の音楽性が失われることである。実際には内容を知るために各国語に翻訳されているが、儀礼には使うことができない。

4 イスラーム法（シャリーア）

原罪思想はない

イスラームでは人間に原罪はないと考えられている。クルアーンにも原初の人間アダムとエヴァの物語が見られるが、旧約聖書の記述と最も異なる点は、樂園で彼らが犯した罪は地上に降ろされる際に許されたことである。原罪思想のないイスラームでは、キリスト教のような贖罪思想も見られない。しかし、人間は本来、道に迷いやすい弱い存在であり、神の導き、つまり神の法シャリーアがなくては、地上に正当で倫理的な社会秩序を作り上げることができない。もともと「シャリーア」とは水場に至る「道」のことであり、人間が生きるための「命の道」のことである。イスラーム法、シャリーアとは、信者が遵守しなければならない神の法であり戒律であるが、同時に、終末論的な救いに至る道でもあり、絶対的な神と被造物としての人間を結びつける絆でもある。

神の法

イスラーム法は、クルアーン、スンナ（預言者ムハンマドの生前の言行録ハディースから得られる知識）、イジュマー（信徒の見解の一致、現実には法学者の見解の一致）、キヤース（法学者による類推）の4点を法源として制定される厳格な道徳規範である。神が決めた法であり、その原理は改変することは不可能である。しかし、成文法ではなく、法学者が原理に則って個々の事例を判定する不文法である。この法は9世紀の中頃までに成立した四法学派（ハナフィー派、マーリク派、シャーフイー派、ハンバル派）の学説を固定して遵守する体制を、現在まで採っている。しかし、実際には個々の法学者の判断によって運用されるので、時代や地域に即した柔軟な対応が見られる。その意味では、現代はこれまでの歴史の中で最も厳格にイスラーム法の遵守が主張される時代でもある。

イスラーム法について重要な点は、特にスンナ派では法学者は平信徒であり、聖職者ではないということと、法判断を採用するかしないかは、実は信徒に委ねられているということである。最終的な判断の主体が信徒であるという事実は、あまり知られていない。

イスラーム法は宗教儀礼のみならず、日常生活、社会生活、経済活動、政治や国際関係にいたるまで、人間活動の全般に深く関わる戒律である。政教一致的な社会が理想とされるために、現在でもサウジアラビアのように宗教的保守派の国はこの法を国家の法として採用している。近代的な市民法を敷いている国、地域でも社会的日常的にはイスラーム法が大きな力をもっている。特に結婚、離婚、子弟の養育、遺産相続などの家族法の分野では、ほとんどのイスラーム教徒がシャリーアに従って生活している。

食物規定として一般的に知られているものには、規定に則って屠殺処理されていない食肉、アルコール類や豚肉および豚由来の食品摂取の禁止があげられる。なお、シーア派（ジャアファリー法学）では、うろこのない魚全般がハラームとして禁止されている。ただし、この場合のうろこのない魚介類は特には貝とカニで、特例的にエビは魚に入れられている。

5 人間と社会

ウンマ

クルアーンでは、人間は地上における「神の代理人」として創造されたとしられている。そのため人間は神の導きに従って、この世に道徳的秩序を作る責任を負っている。ここでは、人間は霊的な側面と肉的な側面の双方をもった自然な包括的な存在として認められているので、人間の自然な欲求や社会的活動を卑しいとする考えは見られない。個人と社会とは、はじめから相関関係にあると見なされており、個人としてムスリムになることは、同時に共同体ウンマの成員となることである。前述のように、イスラームは成立当初から在家の宗教であり「政教一致」的な理想をもっているからである。

イスラーム法の四法源の3番目に信徒の見解の一致である「イジュマー」が挙げられていることからわかるように、原則として教団組織をもたないイスラームでは、宗教上の決定権は一般信徒にある。つまり、ウンマ自体がイスラーム社会の進路について責任を負うことになる。「ウンマ」はムスリムの意識が精神的にも社会的にも集中する中心点である。

イスラーム神秘主義——伝播の担い手

絶対者である神との神秘的合一を究極的な目標として独自の修行を行なう神秘主義が、イスラームにおいても8世紀頃から発生した。神秘主義に参加する者は、共同で修行をする必要性から、修道場を建設したり、優れた神秘家（スーフィー）を指導者として教団を形成したりしてきた。彼らは儀礼や修行方法に各地の伝統文化を積極的に取り入れ、イスラームの土着化を促進した。神秘主義教団は現在でも世界各地で活発に活動し、「イスラーム復興運動」運動とともに思想運動の担い手として、信徒や社会に影響を与えている。

公式には教団組織や宣教制度をもたないイスラームがアフリカの奥地や、遠く東南アジアまで伝播したのは、イスラーム神秘主義集団の地道な草の根的活動によるものである。

イスラーム復興運動と「ジハード」

現在、深刻な問題となっている「イスラーム原理主義」は、世界的な宗教復興運動の一環としてイスラームに起こった宗教復興運動のひとつである。地域や国、その目標によってさまざまな形態をもって展開するので、一概に危険であると判断することはできない。

イスラーム復興運動は、現在の不安定な政治・経済情勢のもとで起こされた社会改革運動や市民運動である。西欧的な自由主義や民主主義とは異なる思想基盤であるものの、イスラームの教えに基づいた独自の民主主義や社会正義の実現、富の公正な分配、人権の擁護、言論の自由、道徳の回復などを目指す活動である。多くは理科系のエリート集団を中心として一般市民の支持を得た穏健な草の根的な運動である。テロや武装闘争に訴える戦闘的集団の動きが世界の耳目をひいているが、彼らはごく少数派である。イスラーム世界でも、彼らの過激な運動は市民的な社会運動から区別され、一般信徒からも批判されている。

過激な武装集団がその行動を正当化するために掲げる「ジハード」(聖戦)とは、本来は「努力」を意味しており、精神的努力や修養を指すものである。戦闘的な意味合いで用いられる場合も、異教徒の外敵に対抗する防衛戦争に限定されていて、非戦闘員や女性や子供、さらにはキリスト教やユダヤ教の聖職者、などに危害を加えてはならない、という厳しい条件がつけられている。今日の戦闘的集団の用いる「ジハード」は本来のジハード思想を悪用したものであることに注意しなければならない。なお、原理主義とは本来キリスト教の聖書中心主義を指す用語で、イスラーム原理主義という使い方は間違い。

追加

セム系三宗教(ユダヤ教、キリスト教、イスラーム)の対照表(塩尻作成)

宗教名	ユダヤ教	キリスト教	イスラーム
創唱者	(モーセ) (民族宗教の一種)	イエス	ムハンマド
信仰対象	神(ヤハウェ)	神 イエス・キリスト (聖霊)	神 (アッラーとは the God の ことで神の名ではない)
創唱者の性質	預言者 (人間)	神の子、救い主 (崇拝の対象)	最後の預言者 (人間)
聖典	ヘブライ語(旧約)聖書とタルムード	聖書 (新旧約聖書)	クルアーン(ムハンマドの言行録ハディース)、旧約聖書のモーセの五書、ダビデの詩篇、イエスの福音書(新約聖書の最初の4書)
信徒	イスラエルの民 (選民、ユダヤ人)	人類 (普遍的)	人類 (普遍的)
行為規範の源	ハラハー(タルムード)	(精神的規範)	シャリーア(イスラーム法)
教団組織・聖職者階級	宗教的指導者としてラビ	教会、教団 聖職者として教皇、司祭、神父 (プロテスタントでは牧師)	教団組織も聖職者階級も原則としてない。 (イマームは礼拝の指導者、ウラマーはイスラーム法学者、時には宗教的指導者の役割も持つ)
理想的な社会との関係	政教一致の契機をもつ (選民の世界征服と約束の土地)	政教分離 (霊肉の分離、日常生活を下級とする)	政教一致の理想(宗教の理想を信仰生活だけにしないで、社会でも実施する)
聖日(安息日)	シャバト(金曜日の日没から土曜日の日没まで)一切の労働をしない安息日	日曜日	金曜日(正式には木曜日の日没から金曜日の日没まで)、合同礼拝の日
暦	閏年を設けた太陰暦を使用、農耕に適している。	キリスト誕生を元年とする太陽暦、グレゴリオ暦ともいう。西暦。	ヒジュラ暦と呼ばれる。(純粋な太陰暦、太陽暦より1年で約11日少ない。四季に一致しない。)
主な食物規定	コーシェル(カシュрут)という厳格な規定がある。酒は許可されるが、豚肉は不可。	宗派によって相違はあるが、原則として食物規定はない。	豚肉、酒類、規定に則って処理されていない食肉などの禁止規定(ハラーム)がある。

